

創成期の学士会 第6代、古田会長の時代

古田会長は、当時から長年本会の専務理事をつとめた後、日本大学理事となった斉藤源太氏ほか役員有志と協力して、組織体制の充実に取組み、本会発展のために法人化が欠かせぬ要件であると考

え、38年に申請、41年1月27日、文部省の認可を得てこれを実現、名称を日本学士院との英訳が類似することを考慮し、社団法人全国日本学士会と改め、文部省高等教育局大学課主管の法人としてここによりやく活動形態を整えて、第二の発展期に入ることになる。

定款には、「この法人は、会員の親睦研修をはかるとともにその協力により、各自の知性、教養および経験を活用して、教育、学術、及び文化の振興を図ることを目的にする。」と目的



第6代会長
古田重二良氏



昭和46年1月23日 京都・都ホテル

が明示され、これを達成するため、別に述べる8項目の事業が明文化された。この中には、創立以来すでに継続し行われてきたものの他、新たに学術研究に対する助成金の交付と、会館の建設とその維持運営が付け加えられた。

当時の社会状況は、昭和30年から40年代にかけての高度経済成長期に当たり、この消費革命期の生活価値観の中心は、「消費は美德」という言葉に代表されるように、物質の豊かさを重視する画一的なもので、文化的、教養的な関心が薄いといわれる時代であった。こうして文化団体の運動が困難であった時期に、全国的に本会は支持者を増やし、とくに東京を中心とする関東地方に会員増のあったことは、役員、会員並びに事務局が一体となって努力した結果である。

古田会長は、戦後の私学各種団体の設立に努め、かつ本会の維持運営、事業その他多くの面で尽力した。しかし晩年は学生運動が激化して不運のうちに世を去った。



初代理事長
斉藤源太氏



笹川久吾
(京都大学教授) 副会長